

日本気象学会誌「気象集誌」の100%英文化について

日本気象学会誌「気象集誌」(JMSJ: Journal of the Meteorological Society of Japan)は1882年に創刊して以来、日本の気象学の基礎および応用、これに関連する大気物理・大気化学、ならびに気候系や地球・惑星流体に関する研究分野の学術論文を発表する機関誌として、主に国内の会員を対象に刊行されてきました。今日では、英文で書かれた国際誌として広く世界に配布され、気象関連学術雑誌としては、世界で最も古いもののひとつとして評価されています。

世界中の学術雑誌数は1700年代から指数関数的に増加し続けており、1960年から1980年の20年間にはそれ以前の過去の総論文数よりも多い論文が刊行されるに至りました。近年、気象学や大気科学関連の学術雑誌に掲載される論文数が急速に増大するなかで、読者はより評価が高くサーキュレーションの良い雑誌のみを選択的に購読する傾向にあります。21世紀を迎え、今後日本気象学会誌が国際的評価の中で生き残るためには、現状の問題点を分析し改革を遂行してゆく不断の努力が必要です。国際誌としての「気象集誌」が海外に向けてその発行部数を増やす努力を怠っている、時代の波に乗り遅れて対外評価が急落してしまう、という危機感を我々は抱いております。

近年、海外からの投稿論文数も急速に増える状況下で、21世紀に向けて真の国際誌としての位置づけをより明確にする目的で、気象集誌編集委員会は学会理事会の承認を得て、2001年第1号から「気象集誌」の100%英文化に踏み切りました。これに伴い、雑誌のサイズや表紙のデザインにも若干の変更を加えました。今回の変更により、これまで各論文の末尾に掲載されていた日本語要旨が削除される他、裏表紙の論文目次や日

本語による投稿規定なども削除されることとなります。気象集誌発行の財源として、毎年日本学術振興会の研究成果公開促進費の申請を行い助成金を得ておりますが、この変更によりこれまでの50%以上の英文雑誌というランクから、100%英文雑誌へと格上げとなり、国際誌としての内部評価がより高まるであろうという狙いもあります。

ただし、国際誌とはいえ日本の学術雑誌としての日本語要旨は大変便利なものであるから、削除すべきではない、という会員からの強い要望もあります。そこで、和文機関誌「天気」編集委員会と協議を重ねた結果、これまで「気象集誌」に掲載されていた日本語要旨を「天気」に移行することに致しました。国内の気象集誌購読会員のほとんどは「天気」を購読しており、日本語要旨に目を通す機会は確保されますので、特に支障はないと考えます。むしろ、「天気」のみを購読していた会員にも、最新の研究成果に触れる機会ができて有益ではないか、と期待しています。「天気」が負担することになる追加印刷経費につきましては、これまでどおり印刷に必要な相当額を投稿料として著者から請求いたしますので、会員に新たな経費負担を要求することはありません。

なお「天気」に掲載される日本語要旨の編集は、すべて気象集誌編集委員会の責任で行います。

以上、今回の変更には是非ともご理解を頂き、国際誌としての「気象集誌」の今後の発展にご協力下さるようお願いいたします。

気象集誌編集委員長
田中 博